

ハーディの自然主義文学

——その発展とハーディ文学の場——

宮 田 実

I

イギリスの自然主義文学^②の草創期の作品で多くのイギリス本国の批評家に「ハーディ」(Thomas Hardy)の諸作品中最高の傑作^③と激賞された「帰郷」(The Return of the Native)は「テス」(Tess of the D'Urbervilles)「薄命のジュード」(Jude the Obscure)と並んでハーディの三大傑作と評価されるのが一般であるが、この三つの代表作を眺めるとき、年代順つまり「帰郷」「テス」「薄命のジュード」の序列で作者が自然主義作家として拡充発展していった成長過程をみることができる。即ち「帰郷」から「テス」へと進み「ジュード」を頂点として急カーブを描いて開花した発展過程が眺められるのである。作品の随所にみられる余談・アサイド(傍白)・説教・比喩が災いして、フランスのフローベル(Gustave Flaubert, 1820—80)やロシアのトルストイ(Tolstoi)の作品のように、きちんときめこまかい自然主義の作品となり切らないで、古典主義と浪漫主義など前期の残り粕を温存させてこれと自然主義・神秘主義の要素を色濃くミックスさせている「帰郷」からその残り粕をかなり残存させて徹底しない欠陥をもちながらもヒロイン「テス」の悲劇を貧困・家庭の無知・因襲道徳に求めて現実暴露とその批判に身を乗り出した「テス」は一步前進であって、生れながらの貧困を背負って学問の情熱と立身出世の情熱を人一倍もつ石工ジュードが意志薄弱と女と強い飲酒の誘惑に脆くも敗北者となるこ

の一代記は「帰郷」「テス」に含まれる古典主義、浪漫主義・神秘主義をすっかり振り払って自然主義一色に塗りつぶし厳しい自然主義文学の場に到着し、名実共に開花したといえる。——この中でジュードの長男がわづか11才の少年の身で殺人と自殺をとげるそのショッキングな言動は象徴的表現であり、リアリズムと解釈したい——「この小説はハーディの諸作品中全編を通じて希望の少しも含まれない唯一の作品」と評される通り、情熱の浄化・希望・光明のない絶望的作品で非妥協的な作家の姿勢の厳しさを感じさせる陰惨な非情な物語である。

多くの作家がそうであるように、ハーディも亦創作に専念する中でさまざまな要素を持って、さまざまな表裏の二面を現わしながらためらい、悩み、動揺して終着点に行き着いて落着き、しめくくった作家の一人であるが、初期の作品にはかなり明るいユーモア・ロマンチックな要素を秘めた作品を残したかと思うと、古典主義・浪漫主義・神秘主義・自然主義を混然と織り混ぜて、イズムの作品と分けられその範疇に組込まれるのを嫌って創作するような傾向があるかと思うと、かなり意識的に悲劇へと強引にひきずり込む自然主義的要素の濃く表出されたものへと遍歴の旅を続けたようである。これは作者の人生観照・思想の遍歴などがその原因・要素であろうが、彼の生きた80年を越える人生が破乱に富んだ当代のイギリスの歴史・社会と密接に結びつき、かわりあい決定的な影響を蒙り規制・制約されてその作品が誕生したとみ

られるのである。

その例を少し溯って、日本の17世紀末の西鶴文学とその時代にみることは決して困難でない。つまり西鶴文学のもつ現実謳歌・現実肯定の色彩の濃い「好色一代男」を一方にそして後期の作品「好色一代女」に代表される暗い現実否定的な側面、批判的な作品が一方に対照的に存在することである。これは簡単にまとめていえば当時の専制政治家、武士階級が中央集権化・身分制度・家族制度・人間性及び自由の否認による被支配階級へのしめつけ、特に農民に対しては五公五民とか六公四民などの言語に絶する搾取がもたらす反対勢力の育成・抬頭を押えて「生かさぬよう、殺さぬよう」に適当にその搾取支配体制を維持する政策、手段として商業新興ブルジョアジーの進出をゆるさざるを得なかったことに由来するのである。つまり農業・工業などの生産の低下を救うために商人階級の手を借りて全国を市場として売買取引を担当させるセクト的経済から解放経済に拡大されざるを得なかったことによって、商人階級が日の出のような勢いをもって上げ潮にのって勃興し財力を一手にその掌中に収めたことであつた。この商業ブルジョアジーの出身であつた西鶴はそれまでの中世的・反武家階級的なものをこの上げ潮ムードにのって現実肯定的に「好色一代男」を書いた。しかし寛文・延宝期を過ぎると戦後の財閥解体令にも似た制度で、無限に伸びる商人階級の財力支配の可能性は完全に塞がれてしまう。閉鎖された厚い壁の中で西鶴は商業ブルジョアジーの代弁者・階級的自己主張者として現実否定の側に急速に着くのである。以上はほんの一例に過ぎないが「時代と文学」がいかに深いかかわりあいをもっているかを述べようとしたまでなのだがハーディとその時代との関係を強調すると或いは「ハーディは景気に支配されて、ウォール街の株価の変動に一喜一憂する相場師ではない」と批難を受けるかも知れないが、建築技師として生活を始め、やがて作家生活に入ったハーディがドーセットシャ (Dorse-

tshire) の農村に永住してつぶさにイギリスの資本主義発達の国際経済的地位の具現される農村で、農民と共に悩み共に苦しんだことが作品に決定的影響を与えたとみるからに他ならない。

II

このような視点からハーディの生れた1840年前後から「ジュード」を書き終えた1895年頃までの社会的背景、即ち世界経済におけるイギリスの地位を考察すると、イギリスは1800年から1826年に至るまでその市場の独占を喪失して商業は殆んど沈滞して動かず、1826年から1846年までは輸入は年平均3.5%ずつ増加するに止つたが、1846年から1872年まで商業は莫大な割合でその延びを示し輸入は年平均6.1%の増加、換言すれば26年間に約4倍の増加を見せた。これが1872年から1890年までは19%しか増加していない。そして全輸出入額の人口に対する割合は6%減少した。ここに1872年以降イギリスの外国貿易がいかに転換しその資本主義全体の本質的転換がくっきりと写し出されたのを見ることが出来る。

実は、この繁栄に突如として挫折をもたらしした要因は既に1870年代初頭に普仏戦争による異常な形の好況の中に巢喰っており——1871年に脱稿した田園小説「緑の木蔭で」(Under the Greenwood Tree) は春夏秋冬と四季に分けてロマンチックで美しい田園風景を軽妙なタッチで滅びゆくオルガン演奏の聖歌隊にあわいノスタルジヤを感じつつユーモラスに明るく描写した。若い女性ファンシー・デイ (Fancy Day) やダンディなメイボルド (Maybold) を登場させてちょっぴり女性批判(個性の欠如・主体性の喪失・感情的動物)を試みながらハーディの最も明るい作品の一つとなっているがこれも興味深いことである——俄かに1878・79年と引続いて激しい沈滞が襲ったことを知るのである。——この時期にいろいろなイズムを織混ぜながらも、自然主義文学の初期の作品「帰郷」を書き、主人公クリム (Clym Yeobright) の悲劇

と懊悩の深さを描いたのはこの背景と無縁ではない。——これが又しても変動を続けて1881・82年の2年間は暫時の好転をみせるだけだが——この好転の暫時に、悲劇作家ハーディが珍らしく「ラッパ長」(The Trumpet-Major)のような純然たる喜劇を書いて、その主人公 John を通して人生を美しく楽しい愛情の場とみる楽天的な作品を書いたことを見逃してはならない。——再び不況の時代に突込み、稍々長期の不況を続けて1888年までその転換を見ることはなかったが、とりわけ1885・86年の2年間の不況の圧迫は大きかったといわれる。……そして又この期に激動の

振幅の余りにも大きい、波乱万丈の主人公ヘンチャード (Henchard) を創造し極端な上げ潮と没落を象徴的に描いた「キャスタブリッジの市長」(The Mayor of Casterbridge) の出現に注目する必要がある。……これは1889・90年に入って一寸好転し、これ以後は景気変動の波はその大きさを減少してしまっていたが、これによってもいかに当時のイギリス経済が脈打ってカーブを描いたかを知ることが出来る。とりもなおさずそれは国際経済的性格の変動に基づき、イギリスの資本主義が従来の独占的地位を喪失したことを明瞭に物語るのである。(次表参照)

年 代	イギリス経済の状況	書かれた長編小説	明るい暗いか (喜劇と悲劇)
1870年代初頭	普仏戦争による異常な形の好況	Under the Greenwood Tree, 1871	最も明るいユーモラスな作品 田園小説
1878年 1879年	商業の激しい沈滞が襲った	The Return of the Native, 1878	自然主義文学の初期の作品。主人公クリムの悲劇と懊悩を描いた。妻のユーステシヤの悲劇もさることながらクリムの懊悩の深さはまことに異常である。
1881年 1882年	経済上この二年間に暫時の好転をみる。	The Trumpet-Major, 1880	珍らしく純然たる喜劇を書いた。主人公ジョンをじらして悩ませるアンの愛情の女性の物語りを楽天的に楽しく書いた。
1885年 1886年	不況の圧迫がとりわけきびしい	The Mayor of Casterbridge, 1886	波乱万丈の主人公ヘンチャードを描き破天荒の出世と極端な没落を象徴的に描いた。
1891年 1896年以降	景気変動の波は狭まったが、独占的地位を喪失して依然として続く不況	Tess of the D'Urbervilles, 1891 Jude the Obscure, 1896	その主人公テス・ジュードいづれもいつ果てるともない赤貧の中でやることなすことすべてうまくいかず悲劇の谷間にずりおちてゆく。同情の涙を禁じ得ない自然主義文学の典型。

1830年以後のイギリスは所謂チャーティズムの運動 (Chartist movement) を契機に資本家と労働者に明確に対立した時代であり階級を自覚した時代に入る。イギリスはその地勢・資源・産業などの上に人的な要素・政治の安定などの条件を背景にして他の多くの欧米諸国に較べて半世紀も早く産業革命を体験し、深刻な社会問題に悩んだ。即ち資本・生産が少数者の手に集中され、小生産者は市場から駆逐され農民・家内労働者・手工業労働者は資本主義工場生産の新組織に呑みこまれやがて没落したのであり、新革命のシンボルとも見られた機械化に彼等が激しい憎悪を向

ける過渡的時代に入ったのである。それと同時にこの資本制生産過程の発生に伴ってその機械化の副産物として生じた失業問題とその急増した労働者の生活条件がいかに劣悪であったか。例えば1813年から1833年までに機械織機の台数が2,400から10,000に増加しても、逆に織工の賃金は労働時間が12時間から16時間に延長されたのにかわらず週給12シリング6ペンスから4シリング6ペンスに引下げられ、5才未満の児童までが家庭から工場へ刈り出された時代。ガメージ (R. G. Gamage) はいった。「幾千もの両親たちは自分の子を紡績工場に送らねばならぬ程ひどい低

賃金をうけていた。紡績工場で子供は徹底して働かされた。工場から喜びのない家庭へ、
隣れな幼い生きものたちは手足もぐったりしてよろめいて帰宅した。」^④労使の対立の一き
わ激化してそこからもたらされる歴史的・社会的変革の過程、激動・矛盾・混乱の渦中に幼時を過して10才に達した少年ハーディを取巻くイギリス社会はアーネスト・ジョーンズ (Ernest Jones) の「下層階級の歌」(Song of the lower classes) が作られて労働者と労働の収奪の上に生きる階級との懸隔を憤りと忿懣をこめて描かれた時代であった。これはレッド・リパブリカン (Red Republican) に発表されたものだが、農夫については、
「俺たちはパンを焼くことではさほど軽蔑されていないが、しかしこれを食べることでは大いに軽蔑されている。」織工については「俺たちは布を織ることではさほど軽蔑されていないが、衣服をまとうことでは大分軽蔑されている。」といった調子で他の坑夫・建築工・兵士もそれぞれ同様に下層階級自身の口をついて出る、生活苦の直接滲み出た歌が創作されたのである。^⑤

19世紀の中葉まで労働者の主要な部分はそれまでの農民かあるいはかつての農民の記憶と本能的な農民的態度をもった人々から成っていたのであるが、彼等は工場がガメージの指摘するように極めて劣悪な条件で厭わしい規律のもとに働かねばならぬ憎むべき場所であったのみでなくて、新奇なもので習慣的な生活様式を極端に破壊した手段であるとしてひどくこれを嫌った。しかし1848年以後はこの隣れな農民の生き残りはひどく減少して反抗する力を失って無気力・倦怠感にとりつかれた農民が登場するのである。ハーディはこれを次のように描いている。「青い瞳」(A Pair of Blue Eyes) に登場するウィリアム・ワーム (William Worm) は「人生なんてのは奇妙な泡だね」と口ぐせのようにいってはそれを信じている遣り場のない無気力・倦怠・冷淡な農夫であり「キャスタブリッジの市長」に登場する農民は「幸運である間でも特

にどうということもなく、たとえ落胆してもその没落に恥辱という観念をもたなかった」
(英文下段に掲載)
無気力の勤労者であり、倦怠と欺瞞の農民群像であった。又「キャスタブリッジの市長」の傍白の1コマは生き残りの農民の感情と小規模な農耕生産者としての地位と限界を端的に物語る。

The farmer's income was ruled by the wheat-crop within his own horizon, and the wheat-crop by the weather. Thus, in person, he became a sort of flesh-b-
arometer, with feelers always directed to the sky and wind around him.

Their impulse was well-nigh to prostrate themselves in lamentation before untimely rains and tempests,

「農夫の収入は彼等の限界内にある小麦の収穫高によって支配され又その収穫高は天候に支配された。こうして彼等は体の周囲の空と風の方へ常に向っている針をもつ一種の人間晴雨計になった。……不順な雨や嵐の前には彼等自身をなげきの余りひれ伏させるほどであった。」^⑥

そしてこの歴史的変革に基づく社会構造の推移は農民感情をして勢い運命論者のモノローグにまで容赦なく運び去った。

They had been of comparatively no account during their successes; and, though they might feel dispirited, they had no particular sense of shame in their ruin. Their hands were mostly kept in their pockets; (they wore a leather strap round their waists, and boots that required a great deal of lacing, but reemed never to get any.) Instead of sighing at their adversities they spat, and instead of saying the iron had entered into their souls, they said they were down on their luck.

「彼等は幸運である時でも特にどうということとはなかったし、又たとえ落胆を感じても特にその没落に恥辱という観念をもたなかつ

た。

彼等の両手は大低ポケットの中に突込まれていた。……逆境に対し嘆息をもらさず、ペッと唾を吐きかけ断腸の思いに身をもだえさせることはおくびにも出さず、すべて運が悪い^⑦といった。」諦観し切って無気力に陥った農民がここにクローズアップされる。

「遙かに狂乱の群を離れて」(Far from the Madding Crowd) に姿を見せるバスシバ (Bathsheba) ボールドウッド (Boldwood) その下に働くプアグラス (Poorglass) コガン (Coggan)・「帰郷」のキャントル (Cantle) 親子・フェアウェイ (Fairway), 「青い瞳」のヘイモス (Haymoss)・サミー (Sammy) 同じく「帰郷」のジャイルズ (Giles Winterborne)・ソル (Sol) ヴェン (Diggorry Venn) ディック (Dick), 「窮余の果てに」(Desperate Remedies) のスプリング・グローヴ (Springgrove) 彼等はいずれも小農業的特徴を強く示した「労働といえば引力との格闘以下のことを意味せず、快楽といえば引力との格闘の諦め以上のことを意味しない^⑧という一つの刻印のもとに生れた」労働者・農民ばかりであったのだ。即ち田園の平和を根柢から破壊し旧社会を崩壊し去って生き残った小農業者・貧農・手工業者にハーディは同情と愛情をこめてリアリスティックに描写したのである。反面この農民の根柢に一貫してたくましい雑草のような生命力とヴァイタリティとユーモアを忘れない、楽天的な生活感情を織り混ぜることを忘れなかったことがプリーストリー (J. B. Priestly) に「シェークスピア以来絶えてみられなかった程に朗らかに朴訥に農夫が寄り集って語り合っている^⑨」と感じさせたようである。

III

「帰郷」における自然主義的要素は何といっても主人公クリム・ヨーブライト (Clym Yeobright) の悲劇にあらう。これが出版された時代は前章に明らかなようにイギリス資本主義が一頓挫を来して極度の不況に陥り、失

業者が増大し、かつて失業は労働市場における需要供給の不均衡の結果、優勝劣敗の末現われるのであって個人に属する問題であると考えられてきたのに対してベウリッジの「失業論」に見られるようにより高い産業一般の問題として構造的に現われるという見方が強まる程の深刻な暗い時代であった。これを作家らしい強烈な感受性で受けとめ、この時代風潮を必然的な形で捕え、これを醸成させ再生したものと見てよかろう。冒頭に直ちに姿を現わす舞台となるエグドン・ヒースの描写にしても陰惨・憂鬱な風情は一種のシムボリックな表現でこの時代風潮がハーディをこよない代弁者に仕立てて自己を露顯したものである。主人公クリムは故郷の村で遅れた村人を教育する高い情熱にとりつかれ、その学校建設を周囲の反対を押切って進めるが、この激しい情熱と抱負を途中で挫折させてしまつて果ては二人の女性一母と妻のユーステシヤ (Eustacia) を殺した罪深い男といつて苦悶に喘ぎながら眼病がもとで失明。精神・肉体共々疲労困憊して憐れにも山上で村人を集めて講話をする後日物語。人世の無情。人生の敗北者に決つてのしかかる非情・冷酷な社会の重みと仕打。哀感が深まる秋の空しい風のように惻々と読者の心を打つのである。このプロットの大団円は種々のズレから和解を求めて遠路傍々草深いクリム夫妻の佗び住いに訪ねたクリムの母を彼が昼寝の熟睡とユーステシヤが折悪しく元の恋人ウィルデーヴ (Wildevve) と逢っていた矢先の出来ごとにと止むなく招じ入れなかった件りでこれを最高に悪意にとって母が怒り絶望・悲歎に暮れて荒野を引返し、[馴れぬヒース歩行に疲労困憊、蝮に噛まれてその毒で行き倒れになり、急遽飛んだ医師の手当も空しく小屋の中で非業な死を遂げる事件がもたらすクリムの懊悩・煩悶・苦痛の十字架であらう。飽くまで執拗に喰い入って読者から離れない。この苦悩・反省は果しなく拡散して加速度を増す。「苦悩に打ちのめされた彼は野良の百姓が木蔭を求めるように死を憧れた。」悔恨の重圧

に押潰されそうな純朴な青年がクローズアップされる。チュー (Samuel C. Chew) の分析に従えば、「作者が近代人の特徴を注意深く観察した結果描き出したもの^⑩」というクリムの悔恨の深さは異常である。ヒロイン「ユーステシア」やその取巻きの人物に寄せるロマンチックな描写を捨象すれば、確かに「テス」の主人公テスと同様な厳しい自然主義文学の骨頂をこの作品に認めるであろう。

作者の悲観的運命論の作用したことも事実だが、その悲劇が貧困・家庭の無知・因襲道徳に原因した「テス」のヒロイン、テスは可憐で純情・誠実な田舎娘であるだけに一層の同情の涙を絞らせた。ハーディは因襲道徳に反抗を示し一方で女性の虚栄・不正を暴きながらも他方で女性の虚げられた地位に同情の眼を向けていた。テスの性格は外界に絶えず順応するために自己の活動を放棄するものでいわば創造的精神乏しく独立性なくすべてを他人に依存する型の女性。テスがアレク (Alec) に凌辱されるに至る経緯を母親の無知と批難して責任を転嫁し、凌辱される場合に抵抗しなかったことの中にも愛情・成功・名誉・世話・防禦もすべてを相手から受取ろうとし、自分を運命の掌中にある儚い玩具と感じ、死の宣告を受けたかのように考えてしまっただけで運命を自ら開拓する意欲と姿勢のない態度は「屈服が是認されるならばそれは無知のためにこうなると抗弁するだけで弁解出来るだろうか^⑪」と痛烈な批判を加えるダフフィン (H. C. Duffin) の説も首肯出来よう。とどのつまり女性の弱さ・女性の地位の低さがもたらすその依存性に同情し、虚げられた女性擁護の立場に立ったのであって「帰郷」のユーステシア、「ジュード」のシューにも同様の眼が向けられたのを知る。終幕ではテスが夫アレク殺害の大罪を背負って官憲の眼を掠めて山中にクレアとせめてもの幸福な一時を過す運命はやがてその幸せも束の間の契りに終って最も悲惨な絞首刑の執行台に昇ってゆく憐れな姿にはからずもユーゴーのジャンバルジャンに示した同情の念に似たものを禁

じ得ない。そしてこれを追うフランス官憲と人生の敗北者に終らせる法律制度に同じ忿懣と批判の眼を注がせ啓かせるのである。

IV

1890年以降はイギリスの資本主義は殆ど停滞気味で好況を回復せず、これが長期間続くのであるがジュードの書かれたこの時期はまさに20世紀の足音が高らかに響いてきた科学と労働者階級のかつてない拡充の時代。ヴィクトリア時代の閉鎖的・妥協的沈滞から堰を切ったようにすべてがこれに反抗し、流れ、溢れ出る過渡期。資本制生産過程が高度に発達して個人と個人の対立。階級の対立。国家の対立の一層激化した時代で「ジュード」のような極度に暗い、悲観的な作品が生み出される土壌となったことは疑う余地がない。必然的成行といってよい。ここでは他の2作「帰郷」、「テス」に見られた要素は殆ど姿を消して明確な自然主義の作品となって登場する。主人公ジュードの一代記はその面目躍如たるものがある。生れついでに赤貧と惨めな逆境に育って人一倍強烈な学問の情熱を持って刻苦精励の独学を続けるジュードは立身出世の野心を秘めて知識階級へ押し上ろうと涙ぐましい努力を続けたが、いつ果てるともない貧困の泥沼の中で、大学の制度や種々の社会悪にうちひしがれ絶望させられて自棄的となって脆くも敗北者となる。終幕は一層冷淡になった先妻アラベラ (Arabella) が花火見物にでている最中に祭礼の騒ぎを窓越しに聞きながら悲惨に死んでゆく。末期の水を与える者もなく。この非情な陰惨な物語りは現在に通じる新しさを具体的に持っている点でも一層の重みがある。なぜなら、私的利益の追求、個人の消費生活に生甲斐をかける歪んだ人間の生の営み。差別・特権が無反省に横行して無目的な行動に狩り立てる非人間性を絶えず培養しつつある今日の状況の中で、どんなに立身出世・栄達を夢みて努力し或いは誠実に生きようとしても所詮は膨大なメカニズムの中に閉じこめられ、鉄の扉に塞がれ

ては、人間はただ機械化され非人間的に規制抑圧されてその精神・肉体がむしばまれ、その労働と生活が耐え難いものとされてどうしようもない個人の無力をそれに基因する絶望・孤独・退廃・自棄のあげくの果ては社会機構の重圧のもと、虫けら同然に踏み潰されてしまう現実の社会的状況をつぶさにみつめさせずにはおれない姿で描き出されたジュードの悪戦苦斗のドキュメンタリーにとりわけ厳しい重さがあるからであろう。

1895年に書きおろされ、ヴィクトリア朝のブルジョア道徳・宗教・法律・学校制度に反対し消極的な生活態度に反抗したハーディはこの作品を最後に以後小説を書くのを断念して詩作に専念して晩年を送ったという事実に明白なようにひどく世論の反撃を買ったが—特に僧侶階級からの抵抗のうけ方は激烈で神聖視する聖句が濫用され侮辱されたと激昂したウェイクフィールド (Wakefield) の僧正は焚書事件さえ惹き起すに至った——この作品の描き方の中に20世紀の展開する一歩手前のかつてない科学の拡充と資本主義制度のもつ自己矛盾の一層深まる中で、それより生ずる政治的・経済的混乱に基因する失業者の増大・労使の対立の激化・荒廃と虚無の顕著となった社会を通じて当代のイギリス民衆の生活の厳しい現実をくっきりと生々しく描き出しているといえよう。

ハーディはこの激動のイギリス社会にあって資本家と労働者に鋭く対立した19世紀後半に既に社会主義者ロバート・オーエン (Robert Owen) に興味をもち、ルソー・トルストイの人道主義の崇拝者でもあって、その影響を強く受けて、急進的な側、労働者・農民に味方したことが明らかでこれは幾つかの小説中で顔をみせる哲学・思想の地の文と説教調の傍白からもいえる。例えば「帰郷」のクリムは

“...But the more I see of life the more do I perceive that there is nothing particularly great in its greatest walks, and therefore nothing particularly small

in mine of furze-cutting……”

「自分は人生をみることに従って最高の職業にも格別偉大なものがないのを知る。従って自分の職業である柴刈にも何等卑屈なものを感じない。」^⑫ クリムは柴刈の鎌をとり肉体労働にかねて想像していた以上に歓喜を見出し、愈々破局に追いつめられると、「個人を犠牲にして階級を生かす」といい切ってこれを信念とし生涯を信念に忠実に捧げ尽すのであった。「帰郷」「テス」と歩を進めて「ジュード」に至って初めて自然主義文学は見事に開花した。

However, it was my poverty and my will that consented to be beaten. It takes two or three generations to do what I tried to do in one; and my impulses-affections-vices perhaps they should be called—were two strong not to hamper a man without advantages, who should be as coldblooded as a fish and as selfish as a pig to have a really good chance of being one of his country's worthies.

「然しながらみすみす打ち倒されたのは自分の本位ではなく貧乏のためでした。自分が一代でしようとしたことを立派に仕上げるには二代三代を要するわけです。若しその男が自分の国の偉い人達に仲間入りをするような本当によい機会を捉えようとするのには、冷血なこと魚の如く利己的なこと^⑬豚の如く振舞わなければならないのです。」このジュードの雨中の重病をおしての演説は期せずして群集の大きな喝采を博した。深い苦悶を背負って、日暮れて道遠い薄命のジュードの運命を決定的に支配した貧乏という事実^⑭に挑みこれに向けた憎悪に変貌した批判の絶叫は群集は勿論読者も石工という貧しい身分のゆえに大学の門戸をはばまれた事実をふまえているだけに一層これに共鳴して憐愍・同情の感情を激しくゆさぶられる。テスの悲劇はジュードの場合と同じく貧困^⑮であったが、ハーディは社会機構の中の組織を固定的

な個人の対立者とししか捉えず、人間の生活と意識をそのような組織の中で孤立した個人という枠の中でだけ見るといった欠点を持ちながらも、又 Art, nowadays, must be the mouthpiece of misery, for misery is the keynote of modern life.

「今日の芸術は貧困の代弁者であらねばならない。貧困こそは現代社会の基調であるから」^⑭と述べたジョージ・ギッシング (George Gissing) や

We do not always choose what you call unpleasant subjects, but we do try to the roots of things, and the basis of life being material and not spiritual, the analyst sooner or later finds himself invariably handling what this sentimental age calls coarse.

「我々は面白くない不愉快な物を選ぶつもりは何時もないのだが、とにかく事物の根源に達しようと努力するだけだ。人生の基礎となるべきものは物質であって精神ではない。早晩この分析者はこのセンチメンタルな時代が醜悪と呼ぶものを相も変らず処理することになる」と唱えた、いづれもハーディと同時代のジョージ・ムア (George Moor) と同じくハーディは酔い心地や己惚の眼で人生の諸相を見ることに憤激し、事件の社会的本質を探り、追求する処までは発展出来なかった恨みはあるが、とにかく事物の真相をつきとめ皮を剥して肉、美の仮面を捨てて醜を意識的に暴露することに心掛けた。その結果人生の醜悪な事実には驚き、悲哀を感じて弥が上にもたゆまず貧民生活の厳しい現実を鋭く描き出すことに努めた。従ってこのジュードの受けた特にブルジョアジーからの非難は激烈を極め、ジャーナリズムは喧々轟々と騒ぎ立て毒舌を極めて誅求し、30年前にスインバーンの Poems and Ballads が受けた攻撃、バイロンのうけた攻撃にも劣らない激しさで国内は勿論米・濠州にまで及んで焚書事件は未だしも濠州からジュードの亡骸だと断り書きして一包の灰を封入した手紙まで舞込むその激

しさにハーディは萎縮まず屈せず自分を激励したが、到頭これに懲りて以後小説を書くことを断念して専ら詩作に耽って晩年を過したというのも成程と首肯出来るのである。

高度に発展しつつあった資本制生産過程が帝国主義段階に入って恐慌・退廃・虚無を導き出して民衆の生活を耐え難く荒廃させ、あまつさえ戦争の恐怖が処々に連鎖的に無気味にささやかれ、のしかかってくる中で、大きな歴史のうねりに無残にも押し流されて敗北を喫して退嬰・権力追隋的・書齋人的と隋し、民主への展望指向に無縁となった多くの周辺の作家のそれと全く異質の、現実直視の自然主義文学を勇気をもって打樹てたことは間違いない。

〔註〕

- (1) 本論稿は、同人誌「イギリス文学」(昭和43年3月発行)に発表したものが不十分であったので、それに加筆修正をほどこしたものである。
- (2) ここでいう自然主義とは19世紀末におこったフランスの文芸における自然主義 (Naturalism) を指し、意味する。これは科学的方法論の影響をうけて発生したもので、その時代の典型的な感情すなわち対象を as it is に逃避することなく表現する。進んで醜悪なもの、不愉快なものを赤裸々に分析して大胆に描写しようとする運動で、リアリズムの一種であるともいえる。
- (3) 大沢衛著「ハーディ文学の研究」77頁。例えば Arthur Symonds, W. Robertson Nichol, Samuel C. Chew など。
- (4) R. G. Gammage: History of the Chart-ist Movement, 1854. pp. 54—55
- (5) 帆足園南次著「イギリスの民主主義文学」。
- (6) The Mayor of Casterbridge, Modern Library College Editions. p. 238
- (7) Ibid. p. 288
- (8) Far from the Madding Crowd
- (9) J. B. Priestly: Thomas Hardy
- (10) Samuel C. Chew: Thomas Hardy 1928
- (11) H. C. Duffin: A study of the Wessex Novels. Manchester: Hardy's View of Women.
- (12) The Return of the Native—Macmillan p. 300
- (13) Jude the Obscure
- (14) George Gissing: The unclassified, chap XX

(15) 歴史・社会学的背景についての参考文献。

G. D. H. Cole : A short History of the British Working Class Movement 1789—1947.

Clegg, H. A. : Labour Relations in London Transport, Oxf., 1950.

Beales, D : From Castlereagh to Gladsto-

ne, 1815—1885.

London, 1960 (Nelson's history of England vol. 7)

Pelling, H. : Modern Britain, 1885—1955, London, 1960 (Nelson's history of England vol. 8) 山中篤太郎著「イギリス労働運動小史」

お わ び

種々の手違いから、英文の改行に当ってその単語の区切りを正しく syllable で切ることが出来なかったこと、そのために判読しにくくなりましたこと御容赦のほどお願いします。(筆者)